

江戸時代の忍城を歩く2 西から城内へ

江戸時代、日光館林道と共に、忍城へ通じる幹線道路であったのが、熊谷から行田に通じる熊谷行田道でした。熊谷行田道は、持田の菅谷八幡神社の脇から行田市域に入り、田山花袋の小説「田舎教師」にも登場する城西の「満る岡」前から、現在の国道125号と同ルートをとって、忍城の持田口に通じていました。

この沿線は江戸時代、持田村の村域で、18世紀末ごろに記された「武蔵志」には、民真土二軒ヲ連ネ住ス、と記されていることから、沿線は市街地化していたようです。持田村は忍城付持田組の割役村だったので、城内への伝馬の取り次ぎ、城の堀の藻刈り、城や家中への米の仕送り請け払い、組下村々への書状の伝達、城内および城近辺の火消しなどへの人足負担が課されており、忍城とのかかわりがとても強い村でした。

熊谷行田道の終点は、現在の城西交差点付近にあった持田口でした。ここに持田口門が設けられ、二重の曲輪と二重の堀で守られていました。持田口門をくぐると、忍城内に入るのので、堀に掛かる二重の橋で、門の存在が城外から見えない

ように隠していたようです。

「成田記」には、石田三成率いる豊臣軍が忍城を攻めたとき、真田昌幸・幸村軍と、甲斐姫率いる城方との攻防戦が行われたと記されています。「成田記」は、忍城攻防戦から二百年以上も後に記された軍記物であり、史実であるとは言い難いですが、持田口が忍城の西の守りの拠点であったことは確かかなようです。

このようなことから、江戸時代の持田口門には門番が在中し、厳重に警護され、武士以外の出入りは禁じられていました。持田口門から城内に入った、現在の城西1〜3丁目付近には武家屋敷が軒を連ね、江戸時代後期には、門外の熊谷行田道沿線にも武家屋敷が拡大しました。また、武家屋敷街南側の大宮神社の前には大宮口があり、そこから東に進んだ突き当たりには東照宮、金剛寺、藩校「進脩館」が並んでいました。

明治時代以降、東照宮は移され、武家屋敷もほとんど失われてしまいましたが、「進脩館」の門と伝えられる武家屋敷の門が、忍城跡に移築・保存されています。

(文化財保護課 中島 洋一)



進脩館門

こぜにが with フラベス ちゃん行く!

しょうぐんやまこふん 将軍山古墳

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



将軍山古墳は、さきたま古墳公園内にある全長90メートルの前方後円墳で、6世紀後半に築かれたものなんだ。古墳の頂上部と中段には、いろいろな形の筒状の埴輪(円筒埴輪)が並んでいるよ。

でも、一番の特徴は古墳の中が展示館となっていることで、馬具などの副葬品や埋葬時の様子などが展示されているんだ。古墳の中が展示館になっているのは、全国でも将軍山古墳だけなんだって。もちろん、フラベスは知っていたよね。

今月の表紙

丸墓山古墳頂上から見た日の出の様子。新年の初日の出を見る場所として、いかがでしょうか。今年も、市民の皆さんに親しまれる広報紙を作成していきますので、よろしくお願いいたします。

市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。
市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
市報をカセットテープに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。

